

国家というこの世界を我が物で闊歩する巨獣が互いを喰らいちぎり、血を流し身もだえするかのような時代にセーレイ・ユーリエヴナは産み落とされた。

一九四四年、第二次世界大戦の末期、ソヴィエト連邦の北東の貧しいコルホーズ（集団農場）の家の二人目の娘である。

その妹であるソフィアは三年あとの四七年。三女であり、家で五人目の子どもとなる。そのころには戦争は既に彼女らの国の側の勝利で終わっていた。

しかし、戦勝国となって敗戦国から多額の賠償金を受け取り、多くの土地を占領しようとも市民の暮らしが向上することはない。

政府は共産主義国家の確立に向け、国民を締め上げるかのような政策を止めることはなかったからだ。長く生活を圧迫し続けた戦争の勝利による国民の陶酔は、すぐに冷め切った。シベリアを吹きすさぶ風によって。

姉妹の家は貧しく、父親は他の多くの男がそうであったように家では酒に溺れ、いつも二人の兄である次男と喧嘩ばかりしていた。

セーレイには父と兄が同時に笑顔を見せた記憶がない。母と長女は、工業化を急ぐ政府の方針による地域工場に徴用されていた。

一家には最年長の長男がいたものの、二人が産まれる前に既に徴兵され、一九四二年にスターリンググラードの攻防戦で戦死している。既にこの世に亡い。

セーレイが八歳のころに流行り病でまず姉が死に、それに悲観した母もじきに後を追うように亡くなった。

家族の半分近くを欠いた家では会話もなくなり、そのまま半年が過ぎたある朝、父が居間に倒れたまま冷たくなっていった。そして家中、町中を探しても次男の姿はどこにもなかった。

残された姉妹は親戚の家をたらい回しにされ続け、そしてある家での家長の苛烈な虐待に耐えかね、彼女らはこの脱走を選択する。この広大無辺な北の大地への。

この時、姉が十一歳、妹が八歳。当時のこの国では、ざらにある話である。

セーレイは家出するにあたってその家にあつた食べ物を持てるだけ持ち出し、出る前に柵にあつた酒瓶をすべてたたき割って行った。しかし当然ながら、子どもの手に持てる程度の食べものはすぐに尽きる。

幼い二人に行く当てもなく、暑い夏場であつたからしばらくは野宿と物乞いでなんとか過ごせたが、冬になれば凍死することは目に見えていた。

セーレイは聡明であつた、あるいは生きるためにそうならざるをえなかつた。

妹の手を引き、出稼ぎや行商に向かう大人たちの陰に隠れながら、鉄道の度重なるキセル乗車で首都に向かつた。

不幸中の幸いであつたのが、本来ならば国内パスポート制が導入され移動に著しい制限があつたコルホーズの子という身でありながら、家族の死と別の家への養子という形でその縛りから解かれていたことだろう。

集団農場の人々は底辺で国民の生活を支えつつ、扱いはさながら農奴のようであつた。

だから、セーレイは父も兄も恨むことはしない。ただ哀れに思うだけで。